佐藤 清右衛門 ― 暴れ川と闘う ―

阿武隈川は、福島県南端の旭岳に源を発し、福島県内を南から北に貫いて宮城県丸森町に入り、亘理町の「鳥の海」付近で太平洋に注ぐ、全長二百三十九キロメートルのわが国で六番目に大きな川です。

江戸時代の初めに、今の福島県北部に位置する伊達郡と信夫郡が天領になり、そこで収穫された米を江戸に運ぶようになったことをきっかけに、阿武隈川を利用した舟運が盛んになりました。明治時代に入ると蒸気船も運行されるようになり、物資だけでなく人々の交通路としての重要度も高まっていきました。

一方で、当時は川の両岸の往来は渡し舟で行われていたため、阿武隈川のように大きな川を渡るのは決して簡単なことではなく、特に大雨が降った後は水が増え何日も渡し舟が止まり、人々が困ることもしばしばでした。

明治二十四（一八九一）年、丸森村（現在の丸森町）の二瓶廉吉は、阿武隈川を挟んだ対岸の舘矢間村（現在の丸森町）との間に橋をかけようと立ち上がりました。両村の有力者に呼びかけた結果、二瓶を含む十八人がお金を出し合って隈共社という会社を設立し、この会社が橋を建設することになりました。いろいろと研究した上で、「舟橋」という方式を採ることになりました。これは、両岸に太いロープを渡し、このロープにつないで何艘もの舟を並べ、その舟の上に橋脚を立てて橋を通すというものでした。

天領…江戸幕府が直接治めた土地。

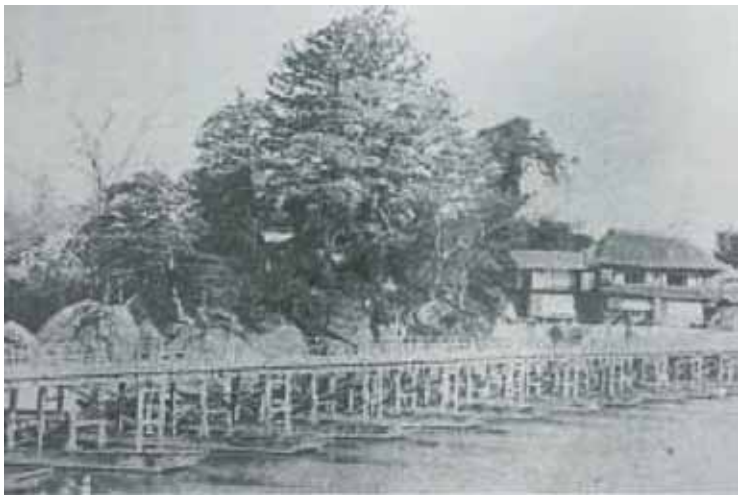
舟運…舟による交通や輸送。

橋脚…橋を支えるはしら。

工事は明治二十四年十二月に始まり、翌年五月に完成しました。地元の人々はこれで安心して生活できると、それはたいそうな喜びようでした。

この舟橋は、通行する人から橋銭をもらい、それで必要な経費をやりくりするものでした。こうした会社の経理関係の仕事を引き受けたのが、舘矢間村の住人佐藤清右衛門でした。

清右衛門は、当時三十歳。隈共社の中では若手でしたが、熱心に仕事に取り組み、周囲の人々から厚い信頼を集めていました。いつしか会社の経営に深くかかわるようになっていきました。



完成した舟橋（丸森側から見たながめ）

阿武隈川は、昔から「暴れ川」と言われたように、舟橋ができた後もたびたび洪水を繰り返し、幾度となく橋の修復が必要になりました。橋の完成から十五年後、明治四十年八月の洪水で、とうとう橋を支える舟まですべて流され、また、川の流れも大きく変わってしまいました。このため、舟橋の復旧をあきらめ、二年後にようやく木橋として再建することができました。しかし、その後も台風や大雨による被害が後を絶ちませんでした。

このような果てしない自然との闘いが続く中で、橋銭のわずかな収入に対して、度重なる橋の修繕や建て替えで莫大な出費を強いられたことから、隈共社を作った人たちも「我々の力で阿武隈川を相手にするのは無理だ」と、一人また一人と手を引いていきました。さらに、明治四十四年秋に隈共社

橋銭…橋を通行するための料金。

の発起人であった二瓶廉吉が亡くなると、その後は、事実上、清右衛門一人で一切を切り盛りしなければならなくなりました。

それでも清右衛門はあきらめず、

（ここでやめるわけにはいかない。人々のために自分が最後までやるしかない）

と、橋の経営を続けました。当時の清右衛門のあまりに一徹な姿勢に、清右衛門と親しい人たちの間でも、「清右衛門に金を貸してはならん」と言い合ったということです。

こうして、独力で橋を維持するために多くの私財を投じ、様々な苦労を重ねた末、清右衛門は大正七（一九一八）年に五十七年の生涯を閉じました。その五年後、橋は地元の要望を受けて県が管理することになり、さらにその六年後、鉄橋に建て替えられ、丸森橋と呼ばれることになりました。清右衛門が亡くなったあと、鉄橋が完成するまで約十年。清右衛門の一念が通じたのか、この間阿武隈川には珍しく、大きな水害は発生しませんでした。当時の最新の技術で建設されたこの鉄橋は、地元の人々から「モダン橋」と親しまれ、昭和、平成の時代を通して八十年以上にわたり、人々の安全な生活と地域の発展に貢献しました。

現在丸森町内を走っている国道一一三号は、新潟県、山形県、宮城県、福島県を横断して日本海と太平洋をつなぐ北日本の大動脈です。この道路が、福島県、宮城県を縦断する阿武隈川とただ一か所交わるのが丸森橋です。

平成二十四（二〇一二）年五月、この丸森橋の約一キロメートル下流に、「丸森大橋」が完成しました。長さ五百五十六メートル、幅十五メートルと、これまでの橋とは比べものにならない大きさです。

一徹…真剣に取り組むこと。

一念…強い思い。

大動脈…中心となる道路。（人間の大動脈の役割からのたとえ）。

今後は、丸森橋に代わり、丸森大橋がさらに大きな役割を果たしていくことが期待されています。この橋の完成は、時代に合った新しい橋をという地元の人々の願いが実現したものです。清右衛門の生涯をかけた思いがより確かな形で実を結んだともいえます。

丸森町中心部の小高い丸に、神明社という神社があります。この境内の一角に、隈共社の歴史を記した記念碑が建てられて、すでに百年ほどになります。いまこの碑のちょうど正面の方向に、丸森大橋がその美しい姿を見せています。十八人の隈共社を作った人々はもとより、陰で橋の経営を長年支えた佐藤清右衛門は、郷土の発展になくてはならないこの新しい橋の完成を、心から喜んでいることでしょう。

隈共社記念碑（神明社）

佐藤 清右衛門

佐藤 清右衛門は、文久元（一八六一）年、現在の丸森町舘矢間に生まれた。「隈共社」という会社に入り、阿武隈川両岸を結ぶ舟橋の経営に携わった。度重なる水害や修理で経営が難しくなったが、多くの私財を投じた後、あきらめずに橋を守った。この橋は、清右衛門の死後（宮城県が舟橋の管理を引き受け）鉄橋に姿を変え、現在「丸森橋」として地域交通の要となっている。